S23
.M8 N2

岷江入楚

鈴虫

38

Freer Gallery of Art
Washington D. C.

鈴虫

五十歳　　　薫三歳

入道宮蓮供養持仏事

入道宮住三条宮給事

秋入道宮六条院寝殿作秋野放虫事　朱雀院御処分也

十五夜入道宮詠月給折節源氏君参給事　閼伽具太之事

松虫鈴虫品定事　源氏琴引給事

兵部卿宮大将君等参宮御方給フ

源氏於右衛門督恋給フ

同夜冷泉院御消息於六条院則参冷泉院給事

有和哥作文興事

六条院於中宮御方御物語之事

中宮六条院為御息所作善事

鈴虫

　　　　　　或　鳶寄并詞巻名

秘
月よ鈴むしの声のいくちかともなり

或説に
おほしかれ秋をいふらしと知りおつる声の秋のさき鈴むしの音を

私云鈴虫いにしへは いまのひきうそらりあそれ源氏よ

むかしは松虫の名をいふとも松むしの声をやりとる

む
源氏の君五十横笛の次の年と　　　冷泉ノ院と　河内

秘
源氏五十巻の夏より秋までのこと　　冷泉ノ院と

弄
冷泉ノ院と源氏五十巻の秋までのこと　　夕霧三十巻

夏はちら次の次のもれさうりよ　　秘　六条院にての蓮を

入道姫宮まし　　秘　女三宮なり

御持仏とも　　御持仏と　平生安敬しかふ仏をいふなり

持仏といふりおほし

此あひおほかしの君のれなさうし　　秘　御持仏といおわれかれとも

いまこ念誦堂にもろさうなるに六条院よりく源の兼定にわたされとも

やうくさいろいろのみのふ　　わたくしらふおもふ持仏と世に念誦

堂の具よりいろくくまうくあるへし

こくれ院　　まれ侍れ仏おもくらくも怖なり

かれのゝよ　　源よりしれつきといむ上事みなくしのふなかわ

なほくえれあまたひなとのたりし紀其なとし

花机覆　綾文紗同染也　応和元年五月十八日御記云

経机各置花足下机加花文綾覆二色綾地敷

めそむきをなつうしう　　秘　深けかにおもなり

安今れをりかのこやうれおかなり

唐の織物しおもうあやなむにぬけりたるかりれ

黄ムシ示
まちうよ
行成まり

菓乃爪丁のさひらとよおりてあつら行せく　四面し
御帳の四面のさひらとはなくらし御のうにほふ曼荼羅哉
けらは常の法會の儀なり
同云菓乃御帳乃さ西方一蓋菓乃爪丁ハ花乃帳飾し在所に
よりて菓の爪帳といへて四方にさわれ帷とまれうかめへし
花よおいるは菓の御帳とりまへりて　字 此仏壇ハおれ物仏壇よ行るの女こ出ん
仏壇よりまへより
幷 秘よよ哉もてありらハ西方のりこひらとあくるなわ
西さら　曼陀羅　秘 曼荼羅 名義出七 満荼羅
ししくしきむ乃ゆきて
やうかうまよ元庵の百光乃くねえうとと　秘 蓮花なりくし　幷円
百歩乃くねえうとと　書うろ布もるえうらも蓮家乃分かもる也　百歩香し
昔ハ庵乃方とま之　秘 庵の方ともく合とうかゆへし
行らし仏名とし乃分るり
阿弥陀佛　脇士菩薩ハ観音勢至也　秘日
観経云无量寿佛住立空中観世音大勢至是二大士侍立左

右二大士者脇士也　秘円
唐太宗太武皇帝為太祖元白皇帝元貞皇后造梅檀写自像二
軀延喜式云盧舎那幷脇士菩薩白栴檀像一合龍
あつ乃え　閼伽具し梵語也
まさら白きむしはさ乃ちら次　行らし須よ黄木白乃蓮華
これハ佛りむしみしより
花ハむと佛りはうさうよ入る蓮と合もきまるところ花色
かううれろうと　秘 花ハ日中乃方し幷円
荷葉方　蓮花よりそへらまふれよ此方と合もうかれ
とちとうしわく後きて　蜂蜜しあきわよい蜜乃いあととらいをと
のそうこうかれりわ後くしとしうと
蜂乃宰とのそくし　字 仏あかれハ生教といむ成よ蜜とと
めく抹香のとくたりうしかうけいかわくとしうと
ひとりほりに白し　荷葉方と池の蓮とかかりはひさ香と
六波羅密の六波羅蜜うせのひと
字 六部女三歳出世のふとまた　私へしくり世あうへ

うけられ御ちきりやうは　公 天暦九年正月四日村上天皇為
母后被供養宸筆法花有八講也
秘 女三宮為御持経し　私 源氏君自筆に書給ふこと
これをたにこの世のちきりを給ふへく
秘 源と女三宮と今生の契りはうすく成けるにより く と
さるくは行らき経　河 源経これを源氏君の給ふとも也
ありしと見のふへく　秘 内々見たてまつりし　弄 同
きうけうかつ○れもちら　河 計　又 隅金し
をこれ成れ人ありて侍　守りまうす今れひとりも源君の
思ひつくはいたき後々やくとし
これをふとにちんのまたくれ侍くえよ　河 沈花足机
おほしとは頂し　ちやうめいとは頂戴し　一説云供養し
経の机を仏の頂上とりあそへりける人あ花ちらしめりよも座
の御供のうるひをロおりく給ふうちよく陀羅尼景陀羅尼誦しうとこ
仏まれおうし内を同れ供の内に経机を案並てまいらする也
公 御供養れ上に仏と同しく経机をおかれけるへし　河海自案ノ

経は皆法りし下の羽におましとゆつりあへる仏の御とかいもとを
供養なり仏経と安置まいらするよしなり
秘 源の自筆の経はあまよ御こともあれは導師のおまへし
弄 沈の花足机にまかせく今も木を広サ三寸厚サ二寸くらいに
色とりて付く木の面に丸く穴をあけてにらぬくくれたり
ことさらくもよしなしといれたく手向し則仏壇のたよりしもとを
沈まくせからかりや或又護摩の壇によりあけし色と
堂かさりなして　河 倉と行なかつし侍備し
うつし海つれあり　講師
きやうかつれんて　弄 又御行香の人ことをとこと
河 行香克 見賢愚経ど　関白朝座夕座中間皆列朝暮両座行
之諸心人数或八人或四人
秘 行香可然也
御こともとあるまじきに出家なりとて　源し行事れも守人出かつて
くりれつかはしあひ　女三の宮よりはかたもおとれとて候にあいなる事
かつかれまくは人いつまらちせいは　そうさ昔わたくしきりあし

やうやくいにけくれなかりそて　秘 そう焼れ極と敎へあつて
物しれ給ふ　佐殿よりも出家ありけりまてと
かゝせられたりけん　秘 補説と人とひそかしく雜せよとし
人の筆をかりしにかゝらん　人にも知しめて
よいのほのあるしられ　弄 女三宮れきの人にもやと思ひて
あられなりける事まよひんとり　女三宮思気の時にれを悔し
おりしけよそ色を悔しありし
弄 世をそむきかはるをあとしのなかなかし
あはれなからりしかりん　薫也 源のつれなくて
心のれたかしまとりそあふて　独尊也とひろく源のおもし
のさくわからぬ人ことハ女三の頃独尊而と今ハ君あなしけれとも
志川かく変まつもおのも　秘 茄ハ人とれ用意とおしへてかわ
女三宮へ独尊なるかとてとも中ぶとのって
かまへしとゆへりのの仏のれたまりしひ　弄 女三宮の夜のおほし
を仏壇より志かしのゝをとりつかわ
すみともにいそうんすのとハ　源の心と女三宮ハ源よりも能よ

おりてよそ世をそむきぬるのちも源の猶なれ給ふかな
思ふしといふのいさりしとおかわ
うし後の世よりぬは　花は心と女三宮の源といふひ捨
ぬまふしうらにしろなわ
うれものおられぬとりよ　弄 五会讃云　一々池中花尽満
花々惣是往生人　各留半座乗花葉　待我閻浮同行人
源 ちられをみとおるしらてみと契りおくてちきりし
抄 五会讃云一々池中しといつもしハあとなかとなれおもてといふり
うちそわたりなあるさし　弄内 正心深庭
秘 尼女三宮 へたてなくはちすの宿を契りても君か心やすますとすらん
弄 女三宮の御返し源の心は此世よりむとおのつへきといふ心をさかしきた
私云 思さまくなくといふもまれなりけりとも源ハ宮と一蓮
よも住かのましきといふかなかく猶へき外
孟 源も仏の心に入ぬ事にていまた家と一蓮に住ましと恨みよりこれ

いふかひなくもをりかしらされ　源の絹し
ねうとあられけりけるをおほしうる　源の海し
ほうりちれをさ海
七そうれかうかく

捧物

河　七僧法服　講師讀師呪願三礼唄散花堂達也
御記云天徳四年六月九日丁丑此日理子内
親王家於園城寺條用中九日御法事其佛經經具及七僧法
謂之七僧　秘同義也
服料物等預給令調備使左近少将伊海誦經布施絹布二百
端又差侍臣五六人一乞行香役

かしはとせよりうへくなしれと然くけりとし
弄　絃指なしかしるべき人なり
秘　弄のむの紀し
ひつしうこ海かわ
いりといとひらのきのひく
秘　女三御出家なるし
なりさせてにゆゆきし紀のなり　源と女三とのをなかへし
ゆふけきささうと　弄　弁者をうし　秘同
河　寛ユタケキ　弁者なるし　弐講師當時もよろなる人とし
これはあしあひく　秘　内しれるし

内よりも山の御門よりも　む　御誦經の使こ門裏よりも院よりも
さらくらかしとなりわ　秘　六条の院よりなり　弄同
院より内うさせのつる　秘　肖息なり
ねくしとおほしうと
ゆふアれ寺に嵐ほなきしまうく　河　蒼苑霧雨之晨初寒汀鶯
立重畳烟嵐之断処晩寺僧帰　閑賦
む　名傳とも布施指物などありてこもうよ嵐ほなきまて
横笛をも傳ともハヘりよろとりふ羽よ付て夕をとハ白面白し
秘　御布施の物はきをいうり講説的時のさ海面白さ云海し
いましもなく　秘　さ海をとへさもゐふよりゐよ入かふとし
院のみとハ此御そうかんのましよ　む　院は門は山のみかとのなし
秘　御処分の文とハ女三文よゆつりのこと文に六条院の文よ梅りのあるとの
朱雀院と三条文とをよく作りなからいまさ梅し筆にて書なを
よをくまくハおわつりなりくし　朱雀院ハ旅より女三の絹ぬ人
きこ文なれハ三条へ梅りゐへとまを源氏のうくれのひかけとめ

ていまくに六条院よりおとこのなかわ
きこしめしてぬを　此両上不及也
は　ほりかそれぬ気まゝすれかとうらうまゝすちらくちいともに
かれ家ともいとこ西より　三条の宮
三条宮のうし　女三宮のうりのつへき所なり
三条の宮のかたにたまかえさせたまふ
は　今諸国与田部長倉　日本紀
院御のそうかん　朱雀院女三宮へ御処分のあとかし
家の御あけうひまふかん　弁　源氏のさせたまふとし
秋のはみしいまそとのまゝ人　弁　女三宮の御いゆうりのふうとの
西のうこしのなわ
御てらにまうひまゐらう　抄　花より女らし
なさこ御りうかうて　後まて出家とまでも人をえり
てなさせ給まふとかり
十余人ありわかとそうちにとけい　弁　居よかぬするを
しる名宮らぬ御しつそては恩のうわあまりし源氏の

ゆふされりわかりのひつ　源氏の女三宮のうへおもはくし
なか後おりひとうまゝ　源氏の女三宮とうくおひ離きぬ猶ともなし
院いの御名まゝ御し　抄　女三宮
弁　女三の宮　源氏のやうまゝひなやまし御かを居名れいゆみゆす
とまう御しきとなぶみし女三のひつうしくおそのかて
人わまつそうなすかし　女三の宮なわ
先より女三の女まゝくおそもし時のみすとおひ出のかて源氏の
おりくまいの世のいさりしともおもよく知りて宮
中れとれおうのにさきれは女三もかまへひてくんしきのしの宮
なやうまこひ主のひしさて出家しのへい今は宮やときよれ
源氏のゆくいひなやまゝしのへい三条の家へも帰りらくおかせと
きれうまさし色のくさをえの縁なとるとし
十五夜の月のまゝいうけうらしかに　弁　八月十五夜よりさき
うつしうり　抄　先よりみちりしくちり前ノ段とハ別とし
おのれおもつきれをとし　史あるいきやひし　あうろし
まいのうかりのひく　源氏の女三のかうへおもほうし

言の音いとゞすごけうみつゝ夕なる　面白時分又出る夜あくし
河らの大臣　河原院ノ大臣也　左大臣のよし
秋の出のよ思いつまとなる中に　秘 源の詠也
中宮のうけ給ひ哀とと　む 秋好中宮の御事也 新月
秘 秋好中宮の御事なりしてなるべし
身り給ひつゝ御せりかへりし時ほとゝぎす
秘 みなしよりかへせりかへしにかへり時へきす
さもなくいなしし
君よいめひく気のかくなるなれ
身とて仰るらしよなん思ふ
秘 うらしけんかき出しし人宮をとなし
守 源も宮に仰きなしと女三宮よと御くませんかなれ　秘 松出の人気よとさすし
女三宮 大きの秋ととらしと給りかしと身りをそらさき給むしの数
秘 いまゆんさふりと源のへうかへけくいつり　秘 まり出とゝいつり
む 給出の数よ仰ぬとこかゝふとこひれのかゝはへ源のかゝて

守 なわかいし下に源の御とゝいつり下ノ句義なし
いひよとりやおひ出んなる　秘 源の詞也し給出と挑しかゝとい
ちしわくとなと申わ
也源 なりく弟の部らりといとへとも御残給出のしゐそかりをれ
河 弟の人舎　弁ノヤトリ
む 給出よ女三の宮とぬとへかゝりまのなりといとふいは世を離れる心也
秘 女三の宮と給出に給しく出りかいまさしくちてさしかのとと
守 三条の宮へまりなりんとしるなと源の恨そのかふなわ
めつらしくひきのよ　琴をとめして源の門かゝて
宮の御もし(?)りかこうりのひく　琴とい源のりかゝひのかふゆ
へよなりわく次のふなわ出御神御もし
月さしいく　あまり海さし乱てうつりタ霧しると侍てゝへくさと
まいりとわらのなり給り
新 逸とれなといとき数来むしと言と川宮くや　源のれなよ世君盛衰の
時見の宮気よこの御方よ理とれ音も感慨まるへし
まいの御 推ひよやあらん　折りかれは宮後なりは推て

やし給ふ家まりのうふなわ
たねの君も殿上人のさるべきかぎり　殿上人のさるべきとは
御前なとよれきかしらん人てなりぬべし
弁　夕霧も人々うしろく集りのりて
あれこよおそらし内裏も御こゝの猫をまてのりく
弁　女三宮の御うきなり
いと作れしくてまく
われ竜なときゝ給ひしうりにふひとりて給　秘　源の詞也　弁
源のれらも御程ひなともわりうしてたゞま琴をひきなら
しゝ給ひしなかわ
冷泉院御かくくこよひは月のえん　江　延長御時八月十五
弘き成れ荻咲く露人々におのこえ月れ宴し侍りける時れ哥
拾遺集にあり　藤原經信
これきもんうち発なと　昔は夕霧なと集りのふとまのくよ
く集りれさふなわ

月よみのひのいつとても
江　何とても月みぬ秋はなきものをとりさらくこよひの珠しきな　秘　此文用此門意也
こよひれわくれなる月れ名よ
江　三五夜中新月色　二千里外故人心　白楽天　秘同
瓜播大納言
弁　私云あうけ時をはりれさきらよおろり紀なくてそ人は悲しかりき　秘　かしら来し
此弁とりくる和歌　以上弁
私云あの詞とり白き面白し詞よ家世れかまくくと八二千里
かにけつり柏木れおとといひ出るふ故人のむくと云よ高物おもし
おほかけきくらしぬのおもの　お目やけりより始め私さ海
まく薬りはく紀ゝしと源のゝ詞ひ出くと
いとうなけりし　秘　らなりしきこ　弁　藤ノ字也
弁　藤ノ字也
御こゝのねよ色純わうしめふ　柏木賀後の遊きをみさり
みそれうら弁も耳とくめてん　弁　女三宮うしいは来れおと字
まふうやとと　秘　源の色も女三宮の色を耕きなかで

内かとにもおかし出たる　弄 主上にもうしろと云出さんとて
御前の御あそひにはかにとまりぬると　秘 是よりハ冷泉院
より御せうそこ有つる疑とまをの心なり
左大弁式部大輔　左大弁ハ紅梅の大臣式部大輔ハ系圖ニ無し
河 此人々し冷泉院へ参りゐて
皆かしこくなり侍ると
私此儀かなおの秘ノ義よろしからし　弄 此句冷泉院より消息の返
やれ人とけるかれぬるをこかもお忘れせぬ秋の夜の月
秘 院よりく心しまかせつこをもとまをねとハ月も忘れぬ心なり
弄 月もそれまての心なり
おなしくハと此わしの事ハ　河 かつて雲の月をといかにおかしくは
なとまらんとハよりあるよや　かつて雲の月といへるらん今
人色らやの心しおかしく院よりまいりつることし　弄 月
なふらかはにも見月の所にも　院の御返し
院かふかりもてるしきの身うもわれと早くして心のめて
冷泉院も院はしかりぬ細しまいりのかのかゝのとるとも

なきことかいかくおかし御消息かれいて参りかて
月影ハ　あかし弁はまなてかりう歌かやとられ秋てまたれぬ
河 御ことに所のわ月とまたそうしう歌中をられおられなかとと　旧説
弄 御返しのかかしに源早下の院とか又おかおもまうやすち
冷泉院御位とまりましかせとも月しのかとよかもまうやゆ
秘 御返しかしとおえてよ所の月し花山院御製し此をまうや
むりし冷の院まさ海の　前ノ源の院のなれ往し　弟子說元
御つひよ盃かくいく弥くいとふかし　河 禄家無之
人との御車大さひのまゝよ　弄 弥生の事ふとくけかきんと
そつきとも像てり参り弥つゝし
院の御車よりんそまつり　源氏より西ア日内御月車し
大将左右衛門督　河 英寧ね不入系圖
秘 左大門督弟仕大臣の御事よあきよ通説をまり
私系圖ニハ左馬督かし弟仕の子英寧ね弟ハ又弥なる大東
院よ参りひとく冷泉院よまいりしも此人々よもと他あ人あて
られその左兵門督とハ弥きりよ系圖の所かん人よ載と

彼箏れをハ不截く

下りさねてかり　虚夜布衍なり

西家抄云上薦ハ下惡下發隠後不常変

私説ハ源氏と云アり家と二人なりけるなれ

節なとりをとして　弄 ふる人ハかうらく吹なり源と入り

知ら礼ぬ風り礼流なかりひし

うかてらうく人と書なるをハ　秘 源の権称をかせるし　弄

あく人さ侍りり　源のこよひ礼流余り礼さ侍し

称ひとれひめかす　秘 冷泉院れさ侍し

弄 冷泉院世三業し　字 夕霧三十歳なり

ふそしれぬりおりろく　彼寄まりとみてらり

秘 何わりかる御世を捨く果に佐のへうふえともなり

かこてうしまねかも　字 前かり奇とたうし所さ変とは

こ侍りよううわとむおりしろし

中宮れ流りさに　秘 秋好なかわ　弄 日

ふハりうさ何りかる御をまおよ　秘 源の詞し

何よをつかぬ身れをさ侍

弄 源氏早下ノ詞し

秘 院号なとうりひりうく何よをつかねと早下れ詞し

りくにつけておくられ何　源かりも年齢れおとりうか

人々れ出家し けの世なとのかまと云ゆうくと以り出家勝

月夜 槿 女三宮 す世ハりし以来なとし

世うれまうをとり　隠遁れ事し

さきく後の流そてしなる人をて　弄 中宮へ申給し

秘 家の門ひろきの人とやせしみし来給家うこ何されかすハ色よ

うけの人となり

まいのいとわりおほとうなるれなくひ　む 秋好中宮れ流事し

こ礼まり色をて侍りうまてハ中宮れ流をあつし

こ礼への色をて希うり侍し　弄 中宮の流を着し

秘 秋ねの行躰申しよわをらこハ院をおりて六条院へて御と乗給あさし

おほつ礼うのまうさ侍やうハ

は なりわ色うらへハいとく哀つて知流りなされまうさてうりう

私不及川奇今ハ冷泉院なく人のやうりそてをひおりうちなか

取よ秋なれハいと夜なかうして
いとおりしれれハよむつうして
弁 冷泉院へおりさせたまふへく世中さハかしく御悩さへおもき比
私 秋なれハさ心なかりしに
られ人のそむきかたき　安文女御集ゝなる人のそむきそめける世中よ
あられたしろの身といひにきん
私云秋好ハ安文女御徽子よ法し身なりおわりし此哥も　秘 安用此哥
彼集より至ミ自花よ私尚おりしるへし
それ心のうちらと　弁 何方よりも源と氏とふくらの心といひぬ中
さわらし
私 何かよりも源と氏となくらの心と述かって
法をわく所かいふせきてつらくなりけり
きよ加月や宗と御なてハ
うれり至れ里居
御いとあなとも何さまわぶること　冷泉院御位の時ハ住まとれ常宮家つらく
何さかあれ世しいひなからも　秘 源の詞也 西弁同
なから在氏熟まくらいりこうしとし
秘 世をあらさる者とハ彼も知り

さていとつらきわあさき人の　弁 さしもうるわしくて世
とそむしもろうくさきのとし
弁 かくしきまうさて
月やそうり人もほとよつきくいまよ
心ふ身さへほとさらてすもありくらうしとし
たりひうつより
秘 あへ人さへうつふする心さそのとし
おとりそれ人まよりよきかふ
文 おほ皆人むしき行世といひ
こうし心ひかくすも何りといひつまよそかり
如かうもさにいゝ給ひわれなかりけりと
所御息所れなうしう成りあらん
むら此ハ中宮の心也 弁
弁 中宮の心也 弁
秘 三条院息所霊よ出なるすと源氏ゝらもれ
弁 三条御息所也
安まのかくれいつなかり
うれのをひく出生え御の
秘 もとの宗れいひつらすきり
御かしましし 弁
あかさ人の心ありこ御
宗 是ハ中宮の源氏ょりやなふ詞ともくわろうきハ何の世のを
秘 御息所也 弁

何となしあらなれとても　秘 あのゝ菓なりても花さ添く
あはれなりけりとかく　弁 後世ねかふ
あはれなる人をたのみなりしに　後世ねかふさとも
秘 あひつ給の堪されにて後世のさしきとも
秘 やられ名理もとりしに　いかにおよひきせん人
よろしくめのし妻ふと守さきてかり
つらうあつかのほのかとも　弁 年ねかふにうつる
秘 出家なりしてし　弁 年ねかふさをみ
年齢せんるすし
弁 年ねかふ
きりよさまもあはれねへきしとく
秘 源ノ女し　ひ 源ノ返答も
それほのかなん後ものもなましき
私云是もれるよしきて　秘 源の行し
こと秋なれ挑ミのふとふとけく彼一人よ源さまし言ひかたく源の詞寿物もれ身不れ花源
物語れ秘ぐかし　秘 命ねかふし弁
何 涅槃経云亦如朝露之勢不久停
蘋子云人生一生若朝
露之託於霜菜耳其而幾何豈不感哉 王充 後漢書列傳第三十九王充傳 下云按此語無此語
私右ノ語も諸抄ニ不載之
何 目蓮救母説よみてより
目蓮母地獄よ堕せしをたすけて次に餓鬼畜生道より
目蓮仏になられしより
天上ニ生せし
盂蘭盆経ニハ免一切餓鬼之苦　目蓮具云摩訶目揵連羅耶郡
唐云宋萩氏　盂蘭盆経云落餓鬼中目蓮救母生天経云在大
焦熱地獄中経裏若スル也但救母経ハ大乗目録之外也
弘 目蓮伝く六通を得すと仏よとき[illegible]
とまりやて母れ餓鬼ヶ友よ落らを救ふとせしを盂蘭盆経ニ説り
弁 羅漢ハ仏になれしと云ても授記よ預りしを見ゆ
秘 目蓮救母経ハ偽作の経と只盂蘭盆経よよ仏りをとハ仏よ親
をいり後云なり
女めしにもえつ世語ハさうんなから
弁 出家ハなりて慶ふくし　字 何ノ何文字清し
秘 やう[illegible]よりさし
うつら我父母つとても断くにむかし兜率天となり

こゝおりひのかな　　秘 源もさるへきこと
弁 源氏も出家の心あること　　私此かたりのふとハ源も御息所のこと
かくひともせんとおもふこと　　私ノ義不審し
こうられにとありよそへく　弁 源の何にも不可見し　こゝろのはしとあよ
そへく今静にて世をそむかんとおもひなからも菓のつとめんよれを
うしてひとすゝしてしづかにおもふなり家の心もとありて
私云此義未可解如何　私云ハ六条御息所のことゝおもひのかすも
静ならいと給あはれハ世をそむきてかくら源の歌つとめと一何よ
らつひそもとくししおりひとくゆめせんとおもふよとし
於わ所しかく我御身の心さ給　秘 第子也し
私秋好し源との心ミ給なり
よんそうら出ひさくやもとうりしれありき
かふ時上達部なし御借をしのつとし　秘 六条院の御めくゆり
去宮の女御の心ミ給　弁 明石女御夕霧といふへきと源氏
のかのふかきも此宗院とハ女御夕霧らりも尋よおる給し
秘 明石女御もおひのへとも冷泉院とハ女御夕霧らりも大切よおりひ

まふこと
此も源ひりゆふかしう
かう心為きさ給まく　　秘 冷泉院也し 弁
為をく御菩薩もかられ為よいそうせのことゝ　此泉の御位と去給へるすを源よ心
中宮なりしまりそのかすも　　秋好なり
なふとも此為やもな　　秘 秋好中宮の母息なり 弁
多くの御息所の　　秋好中宮の御孝をおもはかさすよくみ
ええ御出家の事も人みゆかさねすかれハ源氏の意へ
ことく菩り切極の事をはなしいとあもいつと御心中にて
世中を倦くおりひいゆりのみやとなり